
死神 A が現れた

僧侶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神Aが現れた

【Nコード】

N2143S

【作者名】

僧侶

【あらすじ】

主人公の絹井蜥蜴の日常、それは固く砕くことのできないものではない。日常はふとした瞬間壊れていき……

第一話序章 何てことはない日常（前書き）

続きものなのでこれは導入部分。小説書くのは初めてなので至らないところは多々あると思いますがそれは感想の部分にてご指導、ご鞭撻よろしくお願いしますm（―）m

第一話序章 何てことはない日常

ここは渦神都市、人口約8000人というまあまあ数の人が住んでいる。都市といっても主要な機能を担っているという訳ではない。渦神都市は世界的に極東に位置する日本国に所属しているが、それは表面上、形式上だけの事であって、地図上から見ればどこの国にも所属していないような、切り離されているような場所に位置している。そんな場所であるからして、日本国が真面目に管理するはずもなく、入国手続きすら疎かになっている。

しかし、周りに海しかないというのは、どうにも金持ちの道楽になりやすいらしく世界各国から観光客が集まってくる。時には癒やしや余生を静かに過ごす場所を見つける為に老人達が来る事もあるがこの場所がその老人達のお眼鏡にかなう事はめったにない。

何故なら治安がなかなか悪いのだ。表面上は美しい島、地上の樂園渦神都市などとうたっているが入国手続きをまともにしない場所なんて、密入国者などの溜まり場にはもってこいと相場が決まっている。

しかし、この渦神都市の最大の特徴は、景観でも治安の悪さでもなく――学生の割合がその人口の約4分の3を占めている事だろう。学業を発展させ日本国の力をつけようと政府のお偉いさん達が考えたのが十年前。しかし工場や会社などでぎゅうぎゅうの日本国、新たに学校を建てる場所なんてない。

そこで目をつけられたのが放置気味になっていた渦神都市という訳だ。

そんな訳で学生という例に漏れない俺、こと絹井蜥蜴は日々、学業に励んでいるのだが――

「でえ、絹井くうん。学業に日々励んでいるはずの君が5分、10分の遅刻ならともかく6時間も遅れてきた理由を教えてください？」

「徹夜で、大好きな先生に授業で迷惑をかけないように頑張ってる強いて、少し時間があるから仮眠をしようと思って眠ったら夢で先生が出てきて授業をしてくれるというので聞いていたらこんな時間になってしまいました。」

ふっふっふっ、道で迷っているお婆さんを助けて――とでも言うと思ったか！古いんだよ！俺は凡百の人間とは違う。真実と嘘を織り交ぜてこそ嘘は相手を騙せる武器になるのだよ。ちなみに徹夜で勉強してたのが嘘で今まで寝てたのが本当だ。

「そうか。そうか。勉強熱心だねえい。絹井は」

「分かってくれますか、先生。いやあ、さすが先生だ。生徒の話を信じる、教師の鏡ですね。」

「ああ分かったあ。つまり寝坊したという事だろう？だいたいお前は勉強必要ねえだろう。」

「いや、そこに至る過程がですね『問答無用お！』『二ギヤー』」

「ちくしょう、あのババア、言いたくもないお世辞つかってやった

つてのに……」鼻を洗濯バサミで挟まれたままトイレ掃除（女子）をさせられた俺が掃除を終わらせた時には授業はもう終わり、俺は授業を一つも受けずに帰る事になった。

女子トイレを掃除させたのは、きつと女子にトイレ掃除を俺がしたことを広めて嫌な噂をたてさせるためだろう。まったく性格の悪いババアである。

「うゝん。っていうか蜥蜴あんな嘘で騙せると思ったの？」

こいつは幼なじみの相楽蝶々。クラスのまとめ役的存在で、世話焼きである。緑色のショートカットで明るくスポーティーな印象の女である。今も遅刻してきた俺を帰るまで見張っていた。まあ、掃除を手伝ってはくれなかったが……

「あんな嘘とはなんだ。あれでも起きてから一時間も考えたんだぞ。」

「その一時間早く来なよ……」

蝶々がボソツと呟いたが俺は聞かなかった事にした。

「んで、今日は何が変わった事とかあった？」

「うゝん。今日は、なかったけど、明日あるらしいよ。」

「？」

「転校生が来るんだって。」

「なんだ、そんな事かよ。」

この渦神都市では転校生というのは、珍しくない。日本国がどんな生徒を「都市流し」という島流しのような事をしているからだ。

「ええゝ、そんな事って何さあ。クラスに知らない人がくるんだよゝ。ドキドキものじゃない。どんな人が来るんだろうね？男の子かな？女の子かな？僕としては男の子の方がいいかなあ」

驚いた。

こいつがこんな事を言うとは思ってなかったからだ。

「おお、万年彼氏なしで「鉄壁の蛹」と呼ばれてたお前もやっと色気づいたか。お兄ちゃんは嬉しいぞ。」

こうして蛹は蝶々になっていくんだなあと思うとなかなか感慨深いものがある。しかし、

「ええ、違うよ、全然違うよ。そんな理由じゃないよ。っていうかお兄ちゃんって……」

違かったらしい。蛹はまだ地を這っていたいらしかった。

「んじゃあ、どんな理由だよ。実はお前は百合でした。ってオチか？」

蝶々（蛹）は顔を真っ赤にしてブンブンと首を振った。そして怒ったように言う

「違っつたら……だって女の子だったら直ぐ蜥蜴はデレデレするじゃないか。」

最後の方なにやらボソボソ言っていたが聞こえなかった。顔もこれ以上ない位真っ赤になっている。どうやら弄りすぎたらしい。コイツを弄るのは楽しいのだが弄りすぎると拗ねてしまうのが厄介だ。拗ねてしまって、一週間口をきかないなんて事もある。蝶々の態度の違いをクラス的女子全員が心配してその原因である俺を吊し上げた事もあった。

体を十字架にはり付けられて真冬の川に流された時には命を諦めた

ね。体がどんどん動かなくなっていき意識がなくなる感覚は日常では経験したくても、できないものだろう。

そんな過去を思いだしてるのがバレたのか蝶々が心配してくる。

「大丈夫？すごく恐い物をみたような顔してるけど……」

今までふざけていたのに急に黙ったのを怪訝に思ったのだろう。

コイツのこういう所が俺は好きだ。どんな時でも人に気をつかってしまう性格。それはとても損な性格だと思う。しかし、それでも蝶々が真っ直ぐ生きているのは、コイツの人柄に惹かれた奴らが支えているからだと思う。かくゆう俺もコイツに惹かれてるんだろう。けれど俺はコイツを支えている人間の一人にいるのだろうか。得意な事も特になければ、顔も性格も並み以下である俺のような下らない人間が……

「俺でいいのかな。」

ふと言葉がでてしまった。口にするつもりはまったくなかったし、俺自身もう諦めて気にしないようにしているような事だ。何の脈絡もない。たまにあるのだ、ふと自分のあまりにも何もない日々がブルーになってしまうような事が。蝶々も変な顔をするだろうと思っ
て顔を見ると……この上なく顔を真っ赤にしていた。さっき弄っていた時の赤さが薄く見えるほどの顔であった。

「ひあい？！ええええ、とととと、蜥蜴さっきのここ、言葉聞こ
えつてたの？！そそそそんな大事な事っ！こんな場所です！いや、
ばばば僕も女の子だからさ、トイレの前とかじゃなくて、雰囲気は
大切にし、し、したかったんだけど、いいよ。つつていうかと、
と、蜥蜴じゃないと駄目っていうか………」

最初の方は何言ってるか分からないが最後の『蜥蜴じゃないと駄目』
という言葉は胸に響いた。

俺は純粹にコイツの優しさが嬉しかった。嘘かもしれないし気遣い
かもしれないが救われた気がした。コイツはやっぱすごい奴だと
改めて思った。

「じゃあ帰るか、何時までもこんな所にいてもしょうがないしなあ。家まで送っていくよ。」

「ひゅいっ！えつとあの今後ともよろしくね…」

「？、当たり前だろ。お前が頼ってくれたら俺はいつでも力になるぜ。」

「ふにゅ〜」なんとなく会話が噛み合っていない気がしたが今はそんな事どうでもよかった。

気にすれば良かったと思うのは、帰り道、何故あんな事言ったのかを説明した後に何故か泣きだした蝶々に顔面にグーパンチを食らった後の話。

この時、俺はこんな日々が毎日当たり前が続くと思っていた。何もない平和な日々がどれほど幸せに満ちているのか分かうともせず、しかしそれは序章でしかなかったのかもしれない。これから始まるとてもとても血なまぐさい、しかし大切な大切な物語の幕があがる少しの――――

第一話二章 日常の崩壊 破れた殻はもとは戻らない（前書き）

続き

第一話二章 日常の崩壊 破れた殻はもとは戻らない

次の日、絹井蜥蜴は寝坊した。正確には次の日も寝坊した。春眠暁を覚えずという過去の偉人が残した格言はどうやら正しかったらしく、絹井も例に漏れずに春の陽気にやられてしまったという訳である。

「だああー！まずい流石に2日間連続遅刻は俺の鼻が引きちぎれる！？くそつ、走れば間に合うか！？」

時刻は8時10分。学校までは歩いて20分。走って10分。ホームが始まるのが8時20分なので単純計算で信号などの邪魔がなければ間に合うはずだ。

「一応、代返頼んどくかつ！？」

そう走りながら一人言をさげぶ。周りに誰もいないからいいようなものの、もし他人がこの様子を見ていたら十人中十人が病院に連絡するだろう。全速力で走りながら、携帯をいじる。かけるのは勿論頼れる幼なじみである相楽蝶々だ。

「頼むぜえ！学校じゃ携帯の電源きつてるとかいう優等生ぶりは発揮しないでくれよ！」

数回のコールの後、絹井の耳がとらえたのは、優しい幼なじみの声でも、電源が入っていない旨を伝える優しい機械音でもなく、「おかけになった電話は相手側の都合により拒否されています。あなたが乙女心をもて遊んだために彼女はとても傷つきました。っていうか昨日の今日で僕に代返を頼もうとするとかどうかしています。電

話番号をお確かめの上おかけ直し下さい。」

といふかなりの憎しみのこもる幼なじみの声だった。完璧に昨日の事を根にもっているのか、電話はそのまま切れてしまった。しかし、絹井は諦めずにもう一度かけた。

「おかけになつた電話は駄目って言つてるでしょ！三秒以内に切るからもうかけないで！」

一回目とは違い、間違いなく電話をきる意志を電話の向こう側から感じた。このチャンスをのがせば、次は拒否登録をされてしまうだろう。絹井は三秒でけりをつける事を決意した。

「お前もう電話会社の真似する気ないだろ。『さ〜ん』それと昨日の事はよく分らない。『い〜い』けど何度も謝つただろ。『い〜ち』お願いします。蝶々大明神さまどうか代返をば『ぶちっ』」

嗚呼、現実は無情である。電話は切れてしまった。相楽がここまで怒っているのも珍しい。やはり何か悪い事をしてしまったのかと考えるが―――すぐに頭を切り替える。それ所ではないのだ。代返が望めない以上間に合うしか選択肢はない。ここは信号を無視する勢いで―――

目の前に黄色信号が見えた。幸いにもにも周りに車がない。いけると思った絹井は全力で走りぬけようとして、立ち止まった。

目の前に紙を片手に持ってキョロキョロしているお婆さんいたのだ。普段の絹井なら立ち止まっていなかっただろう。しかし今日はなかなか気分がいい。それはおそらく昨日相楽が言つた「蜥蜴じゃないと駄目」という発言に起因しているのだろう。困っているお婆さんを見捨てるような人間が相楽の力になれるだろうかと考えたのだ。

（なんつー下手な展開だ。まあ遅刻したらババアは怒るだろうが、仕方がないだろう。）

しかしそれは所詮、思いつきで、とても軽い気分で絹井はお婆さんに話しかけた。

「大丈夫ですか？お困りなら手を貸しますがー」

果たして彼はどこまで言えたのだろうか。最後まで言った気もするし、大丈夫のだい位までだった気もする。しかしそんな事はどうでもいいほど彼は驚いていた。それもそのはずだろう。

何故なら老婆の手が自分を貫いたのだ

そのときから彼、絹井蜥蜴の人生は変わった。日常から非日常へと、平穩から異常へと、常識から非常識へと変わった。

「えっ」

絹井はそれしか声を発しなかった。視界から入ってくる情報があまりに理解不能過ぎて、脳がそれを処理できていないー否、処理しようとしていない。それは本来人間がもつ本能的な危機からの逃避の働き。

それに伴い体から意識がひっぱられるような、どうしても遊び道具に意識がいつてしまうような感じを人為的に行われているようなーーそう、よく使われる言葉で表すとしたら、自分が自分でなくなるような何とも言い難い不思議な感覚がわきだした。

「ちいつ、この程度でやれるか？」

老婆が喉の奥から響いてくるような、聞く者全てを不快にするような声を出した。いや、ソレはすでに老婆とは言えないナリをしていた。

男は老婆から脱皮するように――まさに老婆の皮を被ったと表現するのに相応しい状態であった。男は妙な言葉を唱えたかと思うと絹井から乱暴に手をひきぬき、同時に絹井は意識を手放した。

第一話三章 転がり始めた石

「ーい、ーぬい、絹井、絹井！」

目が覚めると目の前には ババアもとい先生がいらつしやった。先生は長身でスラツと伸びた手足に年の頃は二十代半ばぐらいであるのに、長い白髪をなびかせている。先生は絹井を出席簿で絹井の頭を叩きながら言った。

「絹井い、点呼ちゆうだぞう。なに寝ぼけてんだあ」

あはははは、っとクラスに笑い声が響き渡った。普段通りの教室、普段通りのクラスメートに囲まれて絹井はいた。

「はあ、すみません。」

「まだ寝ぼけてんのかあ、まあ、絹井だから仕方ないなあ」

またクラスに笑い声が満ちる。なるほど自分は寝ていたらしい。確かに頭には起きたばかりのように靄のかかった感覚がある。

「なんつーリアルな夢をみてたんだ。俺は」

一人呟き、確認に自分の脇腹を触てみると、なんともなっていない。夢だと分かつてても、あの夢には何とも言えないリアリティが存在していた。しかし、確かに今思い出してみると、脇腹を貫かれた時痛くもなんともなかったのだから……

「疲れてんのかね。俺は。」

一人呟くと隣の席の相楽が反応してきた。

「そりゃあ、朝から幼なじみに代返頼むほど急いで学校に来ればそうなるでしょ。」

相楽からしたら何でもない軽口だったのだが、絹井はそこに引っかけを感じた。しいて言うのなら、喉に引っかかった魚の小骨。違和感が不快感を絹井に与え、更に意識すればするほどその不快感には自分の意識を蝕みだす。しかし、この不快感の原因は魚のそれではない。不快感の源は何であるのか、絹井はその原因究明に意識を向ける。不快感の源は直ぐに見つかったようだった。

それもそのはずである。相楽に電話したのは、夢の中であるはずであるし、どうにも自分は朝学校に登校した記憶が曖昧であり――

「んじゃあ、転校生紹介するぞあ」

その先生の言葉に絹井は考えを遮られた。絹井を含めクラスメートの全員が黒板横の扉を注視する。

「ほらあ入ってこい。ここがお前らのクラスだあ」

その言葉と共に入ってきたのは、身長180はあるであろう男と身長160位の女であった。

一見して男の方は野生児のような感じで眼鏡をかけている。特に格闘技などの心得もない絹井でも分かる程、いい体をしている。黒いツンツンの髪との合わせ技で不良に見えない事もないが眼鏡がその印象を和らげているのだろうか？幼い子供っぽさがどこもなく漂ってくる。

しかしもう一方の女の方は対照的で、腰まで伸びたながい青い髪に白い肌、吸い込まれそうな銀の瞳をしていて、片目は髪で隠れているが整った形の輪郭をしている。無表情ながらどこか優しい雰囲気

を纏っていてまさしく大和撫子とはこういう人間を指すのだろうと漠然とみる者に思わせる美しさがあつた。

「英討雄斗だ。よろしく願います。」

「坂口霏奈です。よろしく…」

クラスが水がひいたかのように静かになる。しかし水がひいた後に押し寄せるのは爆発的な力の奔流。

瞬間、クラスのテンションがMAXになった。「ひゃっほー美女きたーwktk」『いや男の方もなかなか…ジュルリ』『うほっいい男』『清楚な美女。俺もう死んでもいい。(泣)』『私が萌えても第二、第三の私がまた萌える!!!!』

学生が転校してきただけで、こんなテンションになる事は渦神都市という特殊な環境下ではほとんどないと言っても過言ではない。そんなテンションにさせるだけのオーラが彼らにはあつた。そして絹井もまた反応を示していた。

「なんてこつた。すげえすげえ。ここまでの美女がいたなんて、なあ蝶ちょ…」

反応を示した、というより真っ先に反応した。先ほどの不快感、爆発的な力によって押し流されてしまったらしい。魚の小骨も水

にはかなわなかった様であった。そして絹井は隣の少女に話をふつた。否ふろうとした。しかしそれは少女のどす黒いオーラによって止められた。そのオーラは転校生二人組の放っているオーラすら呑み込む程に大きく、禍々しかった。しかし、それは少女もまた美しいオーラを放っているという訳ではなく――いや、事実、少女は美しい。165という女性としてはやや高めの身長をもち、緑髪ショートカットで明るいいメージを他者に与える。清楚な曇奈とは対照的に活動的美しさがある。曇奈と比べたとしてもなんら見劣りはしないだろう。――しかし彼女が発しているのはまた違うもの。人はコレを殺意と呼ぶ。殺意が空気を汚染していく。

「……ドウシタノカナア。チョウチョウチャン。カワイイオカオがダイナシダゾオ」絹井は追い込まれていた。何故追い込まれているのかも、どうしてこうなったのかも分からないままであったが一つだけ分かったのは（余計の事を言うと言消される）という事だった。

「うん？何言ってるの蜥蜴？僕は何にも感じちやいないよ。でも、まあ蜥蜴がどうしてもっていうなら寛容な僕は蜥蜴の言いたいを聞いてあげるよ」

相楽は満面の笑顔を顔に張り付かせてその場所に君臨していらっしやった。君臨と聞くと良いイメージを持つ人間はいないだろう。しかし、現在の相楽ほど、君臨の二文字が似合う生物はいないだろう。ともすれば、百獣の王ですら避けて歩く、そう言えるほどのオーラが彼女にはあった。

（禍々しい！いつも優しい蝶々とちがうつ！選択肢を間違えるとたぶんデッドエンドだ！）

（しかしヒントなら沢山ある。蝶々は坂口を褒めたら怒り出した。そして昨日の転校生の下りの会話……つまりそこから導き出され

る答えは一つっ！！）

「英討も格好いいよなあ」

（コレは褒める場所違うだろってコトだっ！！）

ここで一つ明記しておきたい事は絹井蜥蜴は馬鹿ではない。寧ろ天才と呼ばれる人種であるという事だ。彼にとつて日々の生活こそが自らを高める勉強の場所であり、知識欲を満たす源泉であるのだ。だが、天才でも知り得ない事はできない事だ。この時彼は何を元に考えをまとめたのか？それは彼以外知るよしもないがこの時彼は勝ったと思った。自分は人生における選択肢を凡百の人間とは違い、掴みとつたと思った。

瞬間、彼の顔にボクサーも真っ青な右ストレートがはいったのは言うまでもない。意識が失われていく瞬間彼の目に入ってきたのは、怒りの為に般若と化した幼なじみの姿であつた。

英討雄斗と坂口雲奈の席は窓側の席の一番前に決まつた。つまり窓側の一番後ろの席の絹井達とは反対側になる。

ホームルーム終了後転校生達の周りには人の塊ができた。他クラスにも噂が広まっているのか廊下から覗いているやつも少なくなかつた。そして話し合いの結果、絹井は世話好きの相楽と転校生達が学校に慣れるまで世話をする事になった。

行間

ねえ彼、何の問題もなさそうではありません？

まだ結論は早えぜ。アイツのどこが損傷したかも分かってない

それは…そうですが…

なんだ学園生活は嫌いか？

人が苦手なの……………

じゃあ慣れていきやあいい。

お前が世間に慣れるって目的もあるんだからな

……それにアナ様が他の女に囲まれてるのを見るのは嫌です

??、アイツらに敵意はなかったぞ

……この朴念仁

??まあいい。アイツの魂をどうにかしなくちゃいけないのは確かだ。

それが学園生活と関係してくるのですか？

おいおい馬鹿言つなよ。日々平穏が一番幸せだろう？

アナタ様がそれをおっしゃるのですか…

違うね。俺だからこそ、そういえるのさ

第一話四章　つかの間の平穩

世話と言っても対してする事はなかった。大体の事は先生が教えてくれるし、移動教室だつて全員で移動する。

まあ用はお世話係りなんていうのは大義名分みたいなもので人見知りの気がある蝶々が新しい転校生と仲良くなるためだろう。全く本当に世話好きな奴であると俺は思う。

事実、坂口はそれに救われていると言えるのだろう。極度の人見知りらしい坂口はホームルームの後、女子男子問わない質問責めにあつてとても困つていた。そこで蝶々が間に入つて話をしてくれたという訳だ。ちなみに男子の中に「困つた顔もかーわーいーい」などとはざいていた奴が少数いたのでお世話係りとして処理しておいた。

一方、英討はというとあまり人見知りしないタイプらしくもうクラス中の人とコミュニケーションをとつていた。

「なあなああ 蜥蜴、部活とか入つてゐるのか。」

英討が話しかけてくる。このように少し子供っぽいのが恐らくは好かれるのだろう。自分も少し話ただけで、意気投合してしまった。何故か俺の体を心配してくるような質問が多かつたように思えるのは、英討と比べると圧倒的に貧弱に見えるからであろう。

「いや、俺は無所属だぜ。そんで蝶々は陸上部。」

「ふゝん。部活面白そうなのに勿体ねえなあ。」

「面白そうつて、部活やる機会なんて何時でもあつただろ。」

「いや、いろいろ俺も忙しいからなあ。」

「ふゝん。いい体してるのに勿体ねえなあ。じゃあ体験入部つて形で放課後でも回つてみないか？案内するぜ？」

「おお、いいのかよ！相楽さんも霽奈も行かねえ？」

そんな事で俺達4人は部活を回ることになった。

効率が悪いと言うことで俺が英討を蝶々が坂口さんを案内する事になった。

つていうかこの2人が一緒にいるとすげえ絵になる。俺が絵を描けたら土下座してでもモデルになってくれるように頼んだらう。残念な事に俺に絵心は無く、この瞬間を絵に表すのは不可能な様であったが…

部活を1日で回りきるのは不可能なので2日分けて、今日は俺達が体育会系、蝶々達が文化系を回る事になった。

ただ心配なのは美術部に行った時に部員達がどのような反応を見せるのかという事だった。

第一話五章 ハジマリ（前書き）

ここから話の本番ですね

第一話五章 ハジマリ

やはりというか、英討はだいたいの競技をそつなくこなしていた。各部活の部長が土下座して入部してくれるのを頼むのはそこそこにシユールな光景で絹井は影ながらそれを笑っていた。

同時に絹井は違和感を感じていた。あつて間もないが英討はあまり知的なタイプではない。しかしそんな彼が部活中にも係わらず何かに気を取られているように見えたからだ。

（俺が見てるだけなのに気を使つてんのかね？）

思い返してみると確かに英討は部活よりも絹井との話を引き伸ばしているという感じだった。

「うっし、サッカー部も終わつたし、後は弓道部で体育会系の部活は終わりだ」

「そーだなあ、まあさつさと終わらせて囊奈達と合流した方が安全か…」

「？安全つて？」

「ん、まあこつちの話、こつちの話」

そんな事を言い合いながら絹井達は弓道部に向かった。

弓道場に着くとそこは予想以上のボロさを誇っていて部員も一人きりであった。

「やあようこそ、弓道部へ。こんな部活に来て面白いかな分らないけれど、僕は部長の白川だよ。よろしく。」

人懐っこい笑みを浮かべて絹井達を歓迎したのは白川という男で、背は高く凜としていた。

「じゃあ体験したい子は弓を持って向こうにー」

白川の声が途中で途切れた。いや、途切れさせられた。それはあまりにも瞬間的で衝撃的だった。なぜなら

白井の首が英討によって斬られたからだ。

「えっ」

あまりの事態に絹井は声を出せなかった。事態が呑み込めない。状況が掴めない。脳が認識を拒絶するような――ふと頭から情報がフラッシュバックしてくる。

（これは！朝の――夢――！）

まるで今まで知っていた事のように記憶が再現される。感情を無理やり押し付けられるような感覚に絹井は吐き気すら感じる。ふと、脇腹に目をやると――絹井は吐き気を我慢する事を忘れた。

「――！、おええ、うっ、うえっ――」

それもそのはずである今は既に首のない白井の腕が脇腹を貫いているのである。全くといっていいほど朝と同じ場所であった。

第一話六章 ミチ（前書き）

やっと戦闘シーンか

第一話第六章 ミチ

「つく、何がおきてっ!!」

言葉を発している間にも状況は変わっていく。

首のない白井の体が動きだしたのだ。その瞬間、英討が白井の体を弾きとばす。いや、弾きとばしたのだろう。それは白井がいた場所に英討がまるでシオルダータックルでもしたかのような体制でいたからだ。

（何が起きてー！ー！）

絹井にとって、人間の動きが見えないというのは初めての体験だった。

よく漫画やアニメで瞬間移動という非科学的な事を使うシーンがあるが、現実問題できる訳がない。しかし英討はまるで瞬間移動をしたかのように消えたのだ。

絹井は全く状況を理解出来なかった。しかし、今日の前で起こっている出来事が異常であることを視覚が、聴覚が教えてくる。

「ちっ!!このタイミングで襲ってきやがったか。犯罪者といえども結界は自前のを張るのかと思っていたのが間違だったか!!」
英討の言葉が絹井にさらに追い討ちをかける。結界というワード、そしてそれを喋っているのがクラスメートという状況に混乱しない人間はいないだろう。

「英討!!なんだこれは!?何が起きているんだ!?!」

「説明は後だ!!蜥蜴、今すぐここから離れる。校舎の中に入れば時間ぐらい削れる!!」

「それをさせるとでも思うか、屑ども」

白井の体から異形が生まれてくる。その瞬間に絹井に起きたのはデジャヴ。

（俺はこの非日常を経験したことがある?）

「屑どもね。随分と言ってくれるな。結界も張らずに人の魂を武

器にしようとして、その挙げ句命まで道具にする死神には言われたくはない台詞だな。」

「ほう、死神の事だけでなく、俺の事も知っているとかな。屑ではないらしい。たしか英討とか呼ばれていたな。何者だ？貴様」

「お前に名乗る名前なんて持ち合わせとねえよー」

そう言い、英討は走り出す。常人の運動神経で見切れるスピードではない。そのスピードのまま拳を放つ。さらに追い討ちをかけるように拳を叩きつけ続ける。白井は抵抗もできない。

一方的な殴打。身体180を超える英討が小柄な白井を攻撃する様子は見る人が見ればいじめの1シーンに見えただろう。

事実絹井にはそう思えた。そして抵抗もしていない相手を殴りつける英討を

恐ろしく……感じた。

今日転校してきて何でも知っているとはいえないが、少し話しをしただけで裏表のない明るい性格の人間。それが絹井の知っている英討雄斗の人間像であった。しかし今見ている英討はまるで逆だ。抵抗もしない相手に暴力をふるい、絹井の知らないような非日常の会話をしている。それが絹井は心から恐ろしく……思えた。

だから絹井は声をかける。日常に戻るために、誰の為でもなく自分のために

「や、やめろよそれ以上やったら、そいつし、し、死んじまうよ。そ、そいつ抵抗もしてねえじゃねえか。もう十分だろ。」

「……………」

絹井の必死の懇願にも応えずに、英討は攻撃を続ける。さらに激しく、さらに強く。

「やめろって言っているんだ!!!」

絹井にも英討が自分の事を助けようとしていることは、会話から薄々分かつていた。しかし、この攻撃はどのように考えてもやり過ぎである。

「自分を殺した相手の命の為に懇願するとは、屑にしたら珍しい。他人への心遣いが出来てるようだ。」

「!!!!!!!」

しかし、予想は簡単に打ち碎かれる。あろうことが白井は何という事もなく、話し出した。まるでダメージが全くないかのように。

「しかし、俺は屑に心配されるような人外ではないぞ。」

何が起きたか分からない。しかし英討は分かっているようで何かに失敗したような悔しそうな顔をしていた。

「おや、何が起きたか摩訶不思議といった顔だな。何、簡単な事だ。いくつかのスケープゴートにダメージを受け流しただけだ。」

「……スケープ……ゴート……?」

「身代わり……まあ分身のようなものだ。――」

その言葉を聞いて絹井はこの男がやった事が何か分かった。どうやらこの死神だの、人外だの名乗る男は忍者の真似事ができるらしい。まあ全く納得は出来ないが……

しかし、続く言葉はまたしても理解を超越していた。

「――使ったのは人間の命五個に魂三個といったところかな」

はっ、と意味の分からない音が体から出た。こいつは今、何と言っ

た？命？魂？使うとはどういう事だ。身代わりと言っていた、つまり、それは……

「うわあああああああああああ！！！」

気づいたら叫んでいた。この時、絹井蜥蜴は初めて自覚した。これは自分が住んでいる世界ではないと。

その時弓道場の窓からこちらに近づいている人影がみえた。

第一話七章 人とそれ以外（前書き）

展開が早いかな

第一話七章 人とそれ以外

人影の正体は坂口雲奈。一生懸命走ってくこちら側にこうとして
いる。彼女が何をしようとしているのか？答えは明白だった。

（英討と知り合いだったって事は彼女もコレの関係者って事か…）

バン、っと弓道場の扉が開かれる。

「雄斗様、結界も張らずに戦闘は危険です。」

予想通り関係者である事が明らかになった坂口の第一声を聞いた時、
絹井はやっぱりと思ったが、知っているはずの英討の反応は違った。
「雲奈！？何故来た！？今すぐ元の場所にもどれ！！」

戦闘が始まっても一度もうるたえた様子を見せなかった英討の態度
が変化した。

そして白井もまた様子を変化させた。

「ほう、なるほど。その青髪、そして雲奈という名前。貴様ら世に
も珍しい『縛りのない死神』か。」

「…犯罪者にまで名前を知られているとはな。雲奈、今すぐ蜥蜴を
つれて逃げる。」

「しかし…」

「今、一番やるべき事を考えろ！！こいつを倒すのはいつでも出来
る。しかし蜥蜴の命をリスクにさらしてもやる事じゃない！！」

「……了解いたしました。安全な場所まで絹井君を退避させたら、
直ぐに戻ります。どうか、それまでご無事で……。さあ絹井君行き
ましょう。」

「あ、ああ」

坂口は絹井の手を握ると校舎の中に走っていった。

弓道場には人影が二つ残るのみ。

「さて、邪魔者がいなくなったところで第二ラウンドでしょうか。犯罪者」「いつでも倒せるとは言ってくれな。死神のドロップアウトごときが俺に勝てるっても？」

「勝てるさ。死神である事を鼻にかけて人間を見下すようなやつに俺は負けない。」

戦闘が始まった。

校舎内――――

「絹井君、走って。雄斗様がいつまでも止めてられるとは限らない。」

「……」

「絹井君ってば」

「バシン！！！！、乾いた音が廊下に響いた。」

「！！！！？絹井君？」

「いい加減にしるよ！！！！状況も説明しないで俺を引っ張り回しやがって！！！！それにお前らも白井の言う通りなら死神ってヤツらしいじゃねえか！！！！そんなヤツの言う事なんか従えるかっ！！！！」

校舎内と言いつつも見えている光景が絹井の押し殺していた感情を爆発させる。

しかし、それは仕方ない事である。いきなり命を奪われかけたのだ。普通でいられるはずがない。

「とにかく、状況を話してくれ。話はそれからだ。」

どこから話せばいいのか、分からないけど坂口はそう前置きをして話し出した。

「まず絹井君が今、知っている常識は私たちが日常って呼ぶ場所のルールなの。ただどさっき絹井君が体験したのは非日常って呼ぶ場所の常識の片鱗なんだよ。」

「坂口さん達はその住民って訳？」

「私たちも住んでるって訳じゃない。あそこはこの世界のパラレルワールドみたいな場所だけど住んでいけるような場所じゃない。私たちは結界の中でだけ非日常に関わるの。」

「君達は何のためにその…非日常？に関わるの？」

「魂を奪い合うためだよ。」その言葉に絹井は激しい恐怖を感じた。やっぱり坂口さんも英討も人間ではなく、人を屑のように扱う人外なのかと

「でも心配しないで。人間を屑のように扱ったりしないから。」

「えっ!？」

まるで心を読んだような坂口の発言に驚く。

驚いた顔が面白かったのか坂口はコロコロと笑う。心が温まる笑顔である。

「非日常の世界に関わるのは『死神界の死神』『現世の死神』『収集家』『創作師』『魂喰』後は『その他』この位に分けることができるの。さっきのヤツは元々『現世の死神』だったんだけど人を無

闇に殺すから犯罪者として指名手配のヤツだから。ヤツは特別。」

「…本当に突拍子もない話だな。」

「まあ、信じられないかもしれないけどね。」

しかし、坂口の言う事を全て真実だとするとおかしい部分がある。

「でも、白井はその…日常にいるままにおかしな事をしてたぞ。」

「うん、それがアイツの異常な所だね。自分の周りだけに結界を張って非日常の常識を持ち出せるんだ。でもその術式の片鱗みたいのを朝、絹井君の中に入れた時私たちが遠距離攻撃をしたから入れたままにしたみたいで、絹井君を機会をうかがって殺そうとしてたんだよ。」

「…朝のアレは夢じゃなかったのか。」

今更ながら寒気を感じる。

「じゃあ、坂口さん達は俺の命の恩人ってことか…。死神に助けられるって言うのも変なもんだな。死神っていつたら人を殺すもんじゃないのか？」

「死神は基本的には人を殺さないよ。生命の淵になった時にでてる魂を『死神界の死神』は輪廻にのせるために、『現世の死神』はまた元の場所に戻すためにパートナーが人間の魂を一時的に武器化して戦うんだよ。」

時が止まった気がした。

「はっ？人間の魂で？」

どういう事が分からない？人間の魂をどうにかする為に人間の魂を使う？それじゃあ結局、人間の魂は死神の都合で使われているという事になってしまう。

「一時的だよ。一時的に使い終わったら元の場所に戻すよ。」

また心を読んだかのように坂口が弁明するしかし、一時的にだろうと人間の魂は死神都合によって抜かれてしまうという事だ。

「そんな事を言っているんじゃない！！お前らが何をしても知った事じゃないがそれに人間を巻き込むな！！」

絹井は激昂した。一瞬でも坂口達を信用した自分を愚かに思った。

結局、自分達は人間だが相手は人外であったのだ。自分達を道具のようにしか思っていない。

そんなヤツと分かりあえる訳がなかったのだ。

「絹井君……」

「来るな！！！化け物！！！俺の身は俺で守る。お前らなんかにつて欲しくない！！！」

そう言つて絹井は走りだした。一刻もはやくこの人外共との関わりをやめたい。ただその一心だけが絹井の中にあつた。

第一話八章 英雄が立つ一つの理由

弓道場—————

「ほら、どうした。いつでも俺を倒せるのではなかったのか？噂に聞く『縛りのない死神』はこの程度か？」

「くっ」

「それにしても何故、結界を張らない？本気であの屑を助けようとしている訳ではないだろう？結界を張れば俺とももう少しともに勝負できるだろうに」

「…るか」

「ん？」

「本気で助けようとしたら悪いか！？結界を張ればこの場所の時間は止まってしまふ！！そしたら蜥蜴はただ殺されるのを待つしかない。アイツが安全な場所に隠れるまで俺はここからお前を逃がさない！！」

「…ほう、これは驚いた。ドロップアウトだろうと何だろうと人間という屑どもは死神にとっては道具でしかないという常識ぐらい分かっていると考えていた。」

白井はそれが当たり前のように語る。

「死神は人間よりも優れた生物だ。弱者は強者に淘汰されてもしょうがない。人間が動物を殺すのと同義だろう。」

人間も生きる為に動物を殺す。死神もまた仕事を全うするために人間を使う。それは自然の摂理であると白井は言う。

しかし、それでも英討のやるべき事は変わらない。白井に攻撃を与える為に身を奮い立たせる。白井は余裕を崩さない。

「俺にはまだ百を超えるスケープゴートがいるぞ。そして先ほどのように攻撃を受けてやる理由もない。お前は日常の範囲でしか回復

出来ないのに比べて俺は非日常の常識を使える。これだけの圧倒的戦力差を前に何ができる。」

だが、その言葉を英討は笑い飛ばす。

「それでも、俺が命惜しさに蜥蜴の命を諦める理由にはならない。俺は英雄の二文字を名に背負う者。どんなに逆境でも英雄は助けを求める人間を見捨てない。更に蜥蜴は俺の友達だ。負けてやる訳にはいかないな。」

「愚かしい。人間と死神が分かりあえるものか!!」

それだけ言うと、白井は術式を構築する。白井の体が炎に包まれ、熱風が英討の身を焦がす。

「これでお前は俺に触れられない。俺が屑を消す様を見ていると――――!!」

白井の言葉が遮られる。それもそのはずである。何故なら

英討は火が見えてないかのように白井を殴りつけたからだ。

その一瞬で英討の拳は黒く、炭化する。

白井の顔が驚愕に染まる。

「……言った……だろ。ここは……通さねえ。」

「――!!……面白い。何処まで保つかやってみろ!!」

英討は向かっていく。全く勝ち目のない戦場へと。しかし彼の顔には一片の後悔もない。あるのは、使命感と友を守るために行動できている自分への喜びだけだった。

第一話九章 死神の仕事（前書き）

ラブコメ、ラブコメ

第一話九章 死神の仕事

校舎内—————

「待ってよ、絹井君」

「来るなって言ってるだろ！！もう俺に構うな。」

「待ってたら！！！」

ガシツと効果音が出そうなくらい強く掴まれた。坂口が大きな声をだしても、時間帯が幸いしたのか誰も聞いている者はいないようだった。

掴まれた絹井は抵抗したのだが坂口が強く掴んでいたのでちよつとの力では離せそうになかった。

絹井は本気で離そうと思って坂口に向き合った。

「……まだ何か用かよ。」

「絹井君は少し勘違いをしてるんだって。」

「勘違いだと！！！死神は人間を道具にするんだろ！？お前がそう言っただんじゃないか。」

「それはそうだけど……私たちは違うの。」

「……何が違うって言うんだ？お前達も死神なんだろ？」

「正確には私は死神じゃなくて雄斗様のパートナーだけどね。それに雄斗様は死神の能力は使えるけど、死神であることをやめたから『その他』に位置するんだよ。」

「……死神であることをやめた？」

絹井がやつと聞いてくれる態度になったのを安心したかのように坂口は話す。

「確かに死神には自分の仕事をするために人間を道具のように使うヤツが多くいるよ。時にはパートナーの魂ですらゴミのようにね……」

……」

「…そのパートナーってのは何をするためにいるんだ？」

「パートナーは生まれながらにして特殊な武器である事を決定づけられた魂を持つ人間だよ。」

「何！？」

「パートナーは死神の成長段階にあわせて、死神に渡されるんだ。そしてその時に大体は人間の体から抜かれて死神の体の中に入れられる。そうして死神は非日常の世界で強い魔術を使えるようになる。自分の為に調整されたパートナーの魂は強い力を死神に与えるんだ。」

その坂口の口調はまるで何でもないかようだった。

「そんな…そんな事許されていいはずがないだろ。」

「もし！！！！」

坂口は無言を言わせない口調で言い切る。

「もしも死神が仕事をしなかったらね、人間は産まれてこれないんだよ。人が生命の淵に立つと魂が抜ける事は言ったよね？その魂は非日常の世界へと行く。その魂はほっておくと『魂喰』っていう化け物が食べてしまう。それを繰り返したらどうなると思う？」

「どうなるって」

分かる訳がないと絹井は言おうとした。しかし、先ほど坂口は言っていた『死神界の死神』はその魂を輪廻にのせ、『現世の死神はその魂を元の場所に戻すと。それはつまり……』

「……世界から魂が無くなる！？」

まるで当たりと言わんばかりに坂口は頷く。

坂口は突然顔を真っ赤にして叫びだした。美人な坂口がこんなうるたえて慌てふためいているのはミスマッチな美しさを絹井に与えた。

坂口は恥ずかしさからかどんどん小さくなっているように見えた。しばらくちじこまっていたが少し時間が経つと落ち着いたのか蚊の鳴くような声で絹井に懇願してくる。

「…後生の頼みです。どうか、どうか雄斗様には内緒にしておいてください。」

坂口の唐突な変化にまだについていけない絹井は勿論だと言おうとしたがムクムクと坂口をいじってみたいという感覚が湧き上がる。そして絹井はそれを抑える事はできなかった。

「どうしようかな？英討は俺の友達だし隠し事はしたくないんだよなあ。」

「ふっ」

「ふっ？」

「うふふふふふふふふふふふ、そうですか、そうですか。内緒にしてくださいませんか。そうですね。仕方ありませんよね。では力づくでその口塞がせてもらいます！！！！！！」

「なっ！！！！ちよつと待て！！ジョーク、ジョークだって。言わない。英討には言わないからちよつと待って！！」

しかし絹井の言葉も最早、恋する乙女、坂口の耳に入らない。

そして、先ほどとは違う理由で廊下を走る事になった絹井は心に誓うのだった。

(もう、人の恋路に関わらないようにしよう)と。

第一話十章 ごめん（前書き）

こいつら英討ピンチなのになにやってんだろう

第一話十章 ごめん

ようやく落ち着いた坂口にボロボロになった絹井は改めて質問をしていた。

「んで、俺と英討が似てるってどういう事なんだ？」

途中で話は途切れてしまったが確かその話の途中で合ったはずである。もうだいぶ毒は抜かれてしまったが、明らかにしておかなくてはならない事は確かである。

うん。と一呼吸した後、先ほどの動揺など微塵も感じさせない様子で坂口は語り出す。

「雄斗様も絹井君と同じように考えたんだよ。死神が人間を道具のように扱ってはならないだろうって。」

「……」

「だから、雄斗様は死神のルールに縛られる事をやめたの。でも自分一人がやめた所で死神の人間へ対する扱いが変化するはずはないだからパートナーである私の魂を自分の体に入れる事なく、側に置くことに決めたの。その状態で死神の仕事をする事で人間の魂がなくても、パートナーの魂を使い潰さなくても、仕事ができる事をアピールするために。雄斗様は死神の中ではかなり優秀だったけどパートナーの魂を体の中に入れてる死神にはずっと劣るの。パートナーである私に危険が及ばないように一回の戦闘で私を使う回数にも気を使っている。それでも雄斗様は『現世の死神』にも『死神界の死神』にも負けないように頑張ってるの。だから」

坂口は一瞬、言葉を詰まらせる。まるでこの先を言っているのか悩んでいるように見えた。

絹井はそんな坂口に先に進めるように目で合図する。そして、それを見た坂口は意を決したように口を開く。

「お願い。雄斗様を軽蔑しないで。これからも雄斗様の友達でいて

」

坂口が言いたい事は結局はこの事。英討は普通の死神とは違っから勘違いしないで欲しいと。

その言葉を聞いて絹井は啞然とした。てっきり、何かまた死神の恐ろしい事を伝えられるのだと思ったからだ。

しかし、事実坂口の口から放たれたのは簡単な願い。
なんだそんな事かと絹井は口を開こうとした。しかし、よくよく考えてみると先ほどまでの自分の行動こそが彼女たちの今まで受け続けてきた扱いなのではないかと思う。死神と伝えただけで人間から遠ざかられて、人間の為にやった行動も非難される。

それはどれほどまでに悲しい事だろうか。その上、彼女たちは死神すら仲間ではない。それでも、自分の信念を通す彼女たちに絹井は、先ほどまでの自分を殺したくなった。激しい自己嫌悪が彼の身を焦がす。

それならば、少しでも彼女たちに報いる為に、絹井の言うことなど最初から決まっていた。

「ごめん」

「えっ!？」

坂口は何を言っているのか分からないといった顔をする。そこにさらに絹井は言葉を重ねる。

「自分で説明を頼んでおきながら、話の途中で逃げ出してしまつてごめん。友達を信じないでごめん。もう…疑わないから。後、それと…」

「……」

「坂口さんとも友達になりたいんだけど、いいかな？」

「っ!！」

坂口はその言葉に驚いたように固まった。そして、ぼろぼろと涙をこぼした。

「ええっ!!!、ごめん。泣くほど嫌だとは思わなくて…」

自分の言葉が坂口を傷つけたのかと思い絹井は慌てて謝る。

「違うの…ひつく…私たちの事話して…ひつく…それでも友達になろうって…ひつく…言ってもらったのは初めてだったからあ…」

絹井はその言葉に自分の予想的中を知った。そしてもう一度『ごめん。』と呟くと涙を拭くようにとハンカチを取り出す。

しかし、坂口はハンカチを受け取らない。絹井は訝しんだが、坂口

は更に言葉を続ける。

「…ありがとう。…ひっぐ…でも、いいの…うつく…この嬉し涙は途中でとめたぐないがらあ…うえっ…うええええええええん…ひっぐ…うええええええええええええん！！」

そのまま、しばらく坂口は泣き続けた。絹井の発した言葉は彼女たちがずっと求める続けたものであったから。まるで産まれたての赤ん坊が親にすぎるように、彼女は涙を流し続けていた。

「こちらこそよろしくね。絹井君。」

しばらく泣き続けていた坂口は泣きはらした目のままそう言った。絹井としては殴られてもおかしくないような行動をしたと思っていたので、坂口の行動の一挙一動足にビクビクしていたのだから、許してもらえたようであったので取りあえずほっとしていた。

しかし、英討がだんだん心配になってきた。自分が説明を求めたせいで余計な時間を使ってしまったようだった。既に英討を弓道場に残してから一時間ちよつとが経過している。坂口に聞いた話を元に考えると白井より英討は圧倒的に弱いのだろう。未だに白井が追ってきていないという事は英討はまだ大丈夫だということだろうか？それとも、白井は既に校舎内に入りこんでいて――

「それで俺はどうすればいいんだ？」

焦りを隠さずに絹井は訪ねる

「取りあえず弓道場から離れた場所に、隠れていて。この学校でアイツから隠れられそうな場所は……」

坂口が選んだのは、昨日絹井が掃除した女子トイレだった。

理由は単純明白。男子である絹井が隠れるとは思わなく、男子である白井が入るのを躊躇するだろうという理由から。

ここで待っててという言葉を残して個室に絹井を押し込んだ坂口は英討の元に戻っていった。

女子トイレの個室に詰められた絹井は一人呟く。

「結局、俺が何を言っても俺は守ってもらえないもんなんだ。あ。」

彼の一人言は女子トイレの天井にとけていく。

行間（前書き）

出来れば感想をいただけるとありがたいです m ((m

行間

泣いている女の子が目の前にいた。
青い髪に銀の目をした女の子だった

「どうしたの？」

女の子は答えない。

「まいごなの？」

女の子は答えない

「どうしてないてるの？」

女の子は答えない

「なにがそんなにかなしいの？」

女の子は答えない

しかし、顔を上げて男の子の方を見て……

「私の名前は、宝具『雨車軸の如し』。武器の為、感情など持ち合わせない。」

そう言った彼女の顔の半分は醜く焼けただれていて、その銀の瞳にはどこまでも何もなくて

「いたそうだね、だいじょうぶ？」

男の子は女の子に語りかける。

「私は痛みを感じない。私には何も無いのだから。」

「でも、いたそうだよ？いたいときは、だれかにゆえってかあさんがゆってた。」

「誰に言えるというのか？こんな閉ざされた場所で誰に？」

「だいじょうぶ。ぼくがともだちになるから、ぼくになんでもゆってみて」

「……………私は――」

声は震えていた。

――――――――――

緊急事態発生、緊急事態発生。

コードレッド、危険度オールナイン

ブロック7から宝物庫までシェルターで封鎖。目標はブロック3を
現在北に南下。

警備班を突入させます。

何事だ！？何があった！？

宝物庫に侵入者です！！トラップも全て破壊されました！！侵入
者は現在、南競技場の非常脱出通路より脱出を計っている模様！

そこに警備班を送りこめ！！念のため、近くの脱出ポットの機能を
停止！！生徒は教師の指示に従って安全な場所で待機！！活動可
能な死神は警備班の援護、場所の封鎖、生徒の避難に尽力せよ！！
警備班C破られました！！

何！？直ぐに援護を送れ！！怪我人の救護は後回しでいい！！犯人
の目星はついているのか！？

宝物庫から盗まれたのは、宝具『雨車軸の如し』だと思われます！！

犯人の目星は今のところ…しかし、侵入の形跡が無いところから、
内部犯の可能性が高いです！！

内部犯！？馬鹿な！？

犯人の目星がつかしました！！

何！？

扉に付着した指紋から子供のものと判明現在解析に回していますが、これだけの事を行える子供というと……

アイツか！？ならば、警備班では止められん！！プランBを発動する！！外にいる死神にも連絡を入れておけ！！

総統、異常事態です！？

異常事態なら知っている！！何だ！？

南下していた犯人が消失しました！！

何だと！？

これは……

何だ！？早く伝えろ！！状況は一刻一秒を争う！！

はっ！！犯人は既に逃げた模様です…先ほどのデータは向こう側からの妨害のようです！！

ハッキングされていたというのか！？この管理室が！？

はっ！！状況から考えると……

……犯人の目星は？

やはりA組が一人見当たらないようです

やはり、アイツの仕業か……

被害者数確認しますか！？

いや、意味がない…アイツが相手なら被害者数は0だ…

「これから、どうするつもりだ？死神達には完璧に目をつけられたぞ。」

「うん。だろうね。でもいいんだっ！！」

「何故だ」

「ともだちができたから！！」

「…………お前、馬鹿だろ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2143s/>

死神Aが現れた

2011年10月8日23時30分発行